

第四回 SC を考える会 大会レポート



テーマ

研究と市民をつなぐ
～何を伝えるか？何が伝わるか？～

目次

P3	第四回大会概要
P4～7	ブース発表一覧
P8～9	一般社団法人 学生自主研究推進機構 SINAPS
P9～10	10分で伝えます！東大研究最前線
P10～11	Share Study
P11～14	研究者同士のパネルディスカッション
P15	ディスカッション
P15～19	アフタートーク

第四回大会の概要

日時：12月8日(日) 10:00~19:00

場所：東京大学 駒場第一キャンパス

テーマ：「研究と市民をつなぐ～何を伝えるか？何が伝わるか？～」

当日のスケジュール：

10:00~10:20 開会式

10:20~11:40 各団体ブース発表

11:50~12:20 講演『Share Study』 青山俊之(としちる)さん

12:20~13:20 昼食(懇親会)

13:20~14:00 研究者のパネルディスカッション

14:00~14:30 講演『10分で伝えます！東大研究最前線』 鈴木雄大さん

14:50~15:20 講演『一般社団法人 学生自主研究推進機構 SINAPS』 人見将さん

15:30~17:30 ディスカッション

17:30~18:30 発表

18:30~18:40 閉会式

テーマについて

研究の何を伝えていきたいかを研究者の側から引き出し、それを伝えるコミュニケーションを創り出すことがテーマでした。このコミュニケーションを考える際に重要なのは、意図して「伝えたいもの」と相手に「伝わっているもの」の間にはしばしば大きなギャップが生じるということです。このギャップに対してどう向き合うかについて考察する会になりました。

ブース発表一覧

発表グループ①

A

『坊っちゃん lab.』

坊っちゃん lab. 中田涼介

B

『架空商品ゲーム』

UTaTané 澤田和宏

C

『UTaTané・対話デザインから始める科学コミュニケーション』

UTaTané 久保田祐貴

発表グループ②

A

『19 駒場祭「ますらぼ」での数学 SC』

東大理学部数学科 不死原大知

B

『環境問題コミュニケーションの実践と考察』

東大工学部計数工学科 藤田尚輝

C

『ごまかしの SC』

東大 CAST 野々村賢

アブストラクト

①ーA

『坊っちゃん lab.』

坊っちゃん lab. 中田涼介

東京理科大学の実験・研究サークル、坊っちゃん lab.です。私たちは合成生物学の世界大会である iGEM に向けて多角的に活動しています。実験・研究は勿論のこと、活動の一翼として研究内容や合成生物学について一般の方々に知って頂けるように出前授業も行なっています。本日は私たちの活動についてご紹介致します。

①ーB

『架空商品ゲーム』

UTaTané 澤田和宏

科学は身の回りのいたるところに存在し、我々の生活を豊かにしてくれます。まさに研究の成果と市民の日常が技術を通して繋がっています。しかし、世の中には“科学”を使ったウソも存在します。ウソは時に真実より強力で、正しい科学の流通を阻害します。このブースはそんなウソと科学とは何かについて考えてもらいます。

①—C

『UTaTané・対話デザインから始める科学コミュニケーション』

UTaTané 久保田祐貴

弊団体は、「イベントを通した、生活知と専門知の対話・交流を目指して」という理念を掲げる、東京大学の学生が中心となって設立された学生有志団体です。身近な生活に寄り添った対話デザインを出発点としながら、科学・学問を伝える場の創出や専門家の垣根を超えたアイデアの協創を目指しています。今回のブースでは、今年のテーマである「『つくる』ってなんだろう？」の中から生まれた、「アイデアをつくる」「物語をつくる」といった展示を体験いただきます。体験の中で、対話デザインから始める科学コミュニケーションについて、皆さんと対話をしながら一緒に考えていきたいと思います。

②—A

『19 駒場祭「ますらぼ」での数学 SC』

東大理学部数学科 不死原大知

私は19 駒場祭の数学科企画「ますらぼ」で「複素数とその歴史」というテーマで50 分の講演を行いました。今回は、その講演内容と、私が「どうしてそのテーマを選んだのか」について、15 分程度お話をさせていただきます。

②—B

『環境問題コミュニケーションの実践と考察』

東大工学部計数工学科 藤田尚輝

私は2019 年の1 年間、「環境問題のコミュニケーション」に取り組んで来ました。そこには「自然との疎遠」と「科学の万能感」という大きな2つの課題があります。今回は今年行った実践を紹介しつつ、環境問題のコミュニケーションの展開の方向性について紹介します。

②—C

『ごまかしの SC』

東大 CAST 野々村賢

普段の SC では説明が難しい内容などは嘘ではない範囲でぼかして説明することもあります。

本日は、CAST の定番実験をいくつか用意し、そこに含まれる"ごまかし"をご紹介します。

SINAPS

発表者：人見将さん レポート執筆者 藤田尚輝

このレポートでは前半は日本学生自主研究機構、通称 SINAPS の発表の内容について述べ、後半は発表を聞いた上での私の所感を述べたいと思います。

人見さんは『自主研究という考え方』というテーマで SINAPS の行ってきた活動やその背後にある狙い、考え方について触れながら、法人化した今後の活動や目標についてもお話しされました。

SINAPS は文部科学省主催の、学部学生による自主研究発表の場であるサイエンスインカレの OBOG によって発足した団体で、『全国の自主研究を応援しネットワークを広げる』ことを目標にして活動されています。

その主な活動は、サイエンスインカレへの応援、研究交流会、会員総会などによる交流で、全国に5支部あり企業も含めて広い交流が図られています。例えば、創発型の研究交流や企業技術の応用、自主研究の面白さを伝える新入生向けワークショップなど新しい繋がりをもとに新たな研究課題を生むように工夫されています。ここまでサイエンスインカレを中心とした産官学の関係構築を見ることができます。

私が特に注目したいのは、自主研究と研究の違いについて人見さんが述べられていた「いわゆる一般の『研究』は先行研究から課題設定を行い研究する一方で、『自主研究』は日常の疑問から先行研究を参照し研究するといったように入り口が異なる」という説明です。このように「身近な問題意識をもとにしているため、参入障壁が低いこと」を考えると、「日常と研究の間に自主研究は存在している」ということになると表現されています。また、もう一つ大きな特徴として「共通言語として身近な問題を扱っているので、交流が活性化しやすい」ということも挙げられました。しかしながら、異なる分野の者同士が研究成果を伝え合うには専門的知識のギャップもあり、そこに「伝え方」の問題が注目されるということです。そこで、人見さんは「問題の共有、日常とのつながり、言葉の咀嚼」をもとに誰に伝えるのかを明確にした伝え方が重要になると指摘されました。

発表の最後には SINAPS はさらなるネットワークの拡大を目指し、その先には自主研究という文化を作ることを見据えていると述べられました。終わりに人見さんのおっしゃった「科学に興味を持つタネをいっぱい植えていこう」という言葉が印象に残りました。

ここからはこの発表を聞いた私の所感について述べたいと思う。まずは自主研究が日常と研究の中間的存在であるという点であるが、私はさらに自主研究が SP(Science Performance)と SE(Science Education)の両方の特性を持ったものであるという捉え方をしている。入り口が入りやすいという SP の要素と、その後は研究のディスコースに乗っ取って行われるという SE の要素を含んでいる。さらに自主研究によって研究の面白さを得ることができるという SP と SE のサイクルが実現している。このサイクルは、まさしく「タネ」として内在的に科学への興味を増進していくことができる。ここから、自主研究に限らず「SP と SE のサイクル」の実現が科学への興味を増進へと繋がるものと考えることができる。そして、サイクルにおいて最も重要なのは SE が自発的に行うことができ、その中で興味を持たせることができるかという点である。自主研究においてはそれが自発的に行えるものであることが重要なのである。比較対象として「サイエンスショー」を例に挙げると、「サイエンスショー」が例え科学への興味を促したとしても、その先に自発的に行える SE 的要素が少ないのである。そこで言われるのが、科学本を勧めることなどのいわば「アフターケア」の提供であるが、よく見れば科学本も SP と SE のサイクルを実現していると捉えることができる(科学本を読み、専門的知識への興味が湧くことで、さらに科学本が読みたくなる)。しかし、専門的知識が表面的なものかどうかによって SE の度合いは変わることには注意しなければならない。自主研究の重要な特性は興味の強化が SP だけでなく SE の領域にまで広がっていることで、少なくとも「科学がなんたるか」という要素を含んでいることである。まとめると、科学への興味においては SP と SE の強化サイクルが重要で、その強化は自主的に行えるものであるかということが重要であるということである。

このように自主研究は SC と相性の良い活動であると私は考える。第4回のテーマである「研究と市民をつなぐ」ことを考える際の一つの指針になり得るであろう。

10 分で伝えます！東大研究最前線

発表者：鈴木雄大さん レポート執筆：韓東学

鈴木さんはまず、研究者によるサイエンスコミュニケーション（以下では「SC」と呼ぶ）の意義について語りました。研究者が SC 活動を行うことによって、より多くの人の研究活動に対する理解および学術への興味を促す役割を果たすと同時に、研究の思い・様子・失敗談・将来像などといった研究者ならではのお話も語ることができます。研究者による SC に大きな社会意義を秘めている一方、科学研究の多くは「浮世離れ」している傾向が見られ、一方的な情報提供だけでは何を研究しているのか、

何に役立つのか直接にはわからないものも多くあります。ゆえに、科学研究を分かりやすく伝えるためには様々な工夫が必要です。鈴木さんはご自身が所属している企画「10分で伝えます！東大研究最前線」を例に、実際に施された工夫について分かりやすく解説しました。

「10分で伝えます！東大研究最前線」とは、理系文系問わず集まった東京大学の大学院生による講演企画です。様々な分野をとり混ぜて、それぞれ10分間という短い時間で伝えると同時に、質疑応答の時間も確保し、より深く知りたい方の知的好奇心に応えます。東京大学学園祭（五月祭・駒場祭）で毎回企画を開催しています。特に専門性の高さ・分野の幅広さ・分かりやすさなどの強みを誇り、とても特色的な企画となっています。今回鈴木さんは2019年駒場祭の企画で実際に行われた「探査機のもとで働く理論家たち」の講演を会場の皆さんに10分をかけて実演することで、企画の中に凝らされた工夫を鮮明に伝えました。

鈴木さんは最後に、講演および企画全体において特に意識している点について語りました。例えば、講演では単なる論文紹介ではなく、研究の様子や着想に至った経緯、失敗談などを話したり、なんらかの覚えて帰ってもらえるような「take home message」を講演に組み込んだりしています。また、ただ成果を主張するのではなく、自分や所属グループの研究内容と絡めて、今後の発展性や、自分の期待している点について語られました。一言で言うと、研究者がSCを行う際には、「What」だけでなく、研究者だから話せる「Why」と「How」を大切にすることで魅力的なSCにつながることを鈴木さんがおっしゃいました。企画全体についても、お客様の知識欲に応えるための質疑応答や、お客様の新たな学術分野との出会いをサポートすべくランダムに設定された発表順番などが工夫されたそうです。「10分で伝えます！東大研究最前線」の事例をご紹介を通して、研究者としてのSCについて新たな知見が得られました。

Share Study

発表者：青山俊之(としちる)さん レポート執筆：久保田祐貴

アフタートークでの議論の種として、私にとって印象深かったものを3つほど挙げる。

まず「研究者の人を見せる」という部分が一つ印象的だった。私自身、学部4年の時の工学博覧会でまさに「人を見せる/魅せる」ことをテーマに教授・学生座談会やメンバーオススメの本や先生方の思い出の品を陳列するなどして、「ありのままの研究者」を魅せることにこだわった展示を作ったことがあるので、研究を伝えるという文

脈の中で非常に共感できる。研究内容を伝えるだけではなく、人としての研究者、研究のダイナミズムを伝えることは、おそらくこれからの科学コミュニケーションを考える上で非常に肝要だと考えられる。

二つ目に、としちる氏が言っていた「ゼミっぽい関係性」というキーワードは多分何かのヒントになると思う。public と private の間の中間領域が抜けているのが専門家と市民の間のギャップを生んでいる大きな原因かと考えられる。講演終了後に少し話していたことの覚書だが、私の質問に対する答えでアーレント・ハーバーマスあたりを引いてきたので、「実際のところ、あの辺の思想って使えるの？」という質問を投げて見た。としちる氏曰く、初期はそこらへんに注目していたが、最近はドゥルーズやデリダ（注：ポスト構造主義と呼ばれる思想家たち）に注目しているとのこと。「あそび、ゆらぎ、むすぶ」という Share Study のテーマもこの辺の思想家の話からきているような印象を持つ。

三つ目に、「Share Study って結構記事と記事の繋がりが見えづらくて、結局一つ一つの記事が面白くても、ネットワーク化がうまくできていない気がするのだけれど」という質問も投げてみたが、としちる氏自身もそこは認識しており、Share Study の限界とも言っていた。じゃあ例えば、メディアに研究の情報を載せるときにどういうところに気をつければ良いのか？というのは議論の種になりそうである。

研究者同士のパネルディスカッション

司会進行：

二木浩司さん 工学部航空宇宙工学科

パネラー：

西口 大貴さん 東京大学理学系研究科物理学専攻物理学科

森 雄一郎さん 東京大学大学院理学系研究科物理学専攻

二木：「このパネルディスカッションは、普段から研究をなさっている西口さんと森さんのお二方に『研究を伝える意義はあるか』についてお聞きしながら考えていくものです。本日はよろしくお願いします。早速ですがアイスブレイクとして、普段なさっている研究についてお聞きしたいのですが。」

西口：「ミクロとマクロを繋ぐ統計物理学の研究をしていて、実験を行っています。より詳しく言うと非平衡統計力学について研究していて、動き回っているものがたくさん

集まった時に何が起きるかに興味があり、バクテリアなどを用いた群れの動きを調べています。ただ、生物学や化学とは違って、物に依らない法則を調べることが目的です。」

森：「私は量子系を二つ用意して相互作用させて、外れ値に注目する弱測定の研究や弱測定を通して新たな実験手法の考案をしています。」

二木：「研究のインセンティブは何ですか。」

西口：「元々生き物の生き様、動きに興味があり、大学で物理学科に進んだ時にその分野を研究をしている先輩を知って今の学問分野に出会いました。」

森：「私はかなり成り行きでその分野を研究しているところもありますが、振り返ってみれば子供の頃にテスターなどの測定器に興味を持っていたかもしれませんね。」

二木：「ご自身の専門的な研究について、世の中への発信をしようと思ったことがありますか。」

西口：「10分で伝えます！などを立ち上げたのは僕なので、今までやって来たとしか言いようがないですね。研究を伝えるのは重要でやっていくべきだと思いますよ。私の研究は日常スケールでの現象の理解を目的としているので、その結果自分の感じる自然が豊かになれば良いと思っている節があります。なので、面白い実験ができれば多くの人に見てもらいたいと思います。」

森：「自分のやっている研究をそのまま伝えるということは、求められない限りはやりませんね。私は研究よりもそれに用いる物理的な道具に興味があるということ、さらには研究の内容が伝えづらいことから、研究自身ではなく研究の周りの話を伝えることが多いですね。」

西口：「それってテーマを適切に選んでいるだけで、できれば自分の研究について喋りたいということではないのですか。」

森：「自分自身の研究にまだ満足できていないため、周囲に伝えるモチベーションはまだないということです。」

西口：「研究者の世界はSCの世界と連続だと思います。論文や研究領域内での共有、学会での発表、世間一般へのコミュニケーションといろんなスケールでコミュニケーションは行われています。研究者として満足したものが出たら共有したくなるし、すべきだと思います。」

森：「私もディスカッションの中ではモヤモヤする部分を発表したり指摘することもありますね。」

二木：「成果が出れば共有するとのことでしたが、予算申請など成果が出るかわからない中でのコミュニケーションについて難しいと思われませんか。」

西口：「確かにあまりうまくいかなかった研究について発表していないですね。本筋の研究から派生した研究から得られた強い推測から予算申請などはしますね。」

森：「私も手堅いところから書いていくようにしています。」

(聴衆1)「西口さんに質問したいのですが、西口さんはパリに滞在されていたことがあると伺いましたが、サイエンスコミュニケーションや科学者に対する見方はパリと日本では違うのですか。」

西口：「パリは文化の中心で、科学もその一つであるように思います。とても科学者は尊敬されていて、まちの真ん中に高名な文化人の遺体が眠っていることも多く、祀られていました。研究者の給料は日本よりも低いですが、その分尊敬されている部分がありますね。また、科学のイベントが頻繁に行われていて、一斉に街中の研究機関に市民が入れるようなイベントがあります。みんなで科学を共有しようという風潮は強かったように思います。」

(聴衆2)「研究者が説明するパターンとして一つは全体を通して簡単にわかりやすく説明するパターンと、もう一つは後半は(聴衆を)置いていくパターンがあると思いますが、お二方はどちらでしょうか。」

森：「今まで一般向けに組み立てことはないのですが、良い例は挙げられませんが、(聴衆を)置いてかないようにとは思っています。」

西口：「私も(聴衆を)置いてかないようにとは思っていて、私が講演を行う場合では前半で基礎知識を話して、それについて何か一つ持って帰ってもらえるように思っています。後半は自分の最先端の研究を話します。(聴衆が)わからない部分もあるとは思いますが、全部わかってもらおうと「なんだ、そんな簡単なことをやっているんだ」と誤解されてしまう恐れがあるので、ある程度勉強したらわかる『なんだか楽しそう』くらいのものがちょうど良いと思いますよ。」

(聴衆3)「その研究は何の役に立つのか?と聞かれた場合はどう答えるのですか。」

森：「役に立つのかという質問を受けた際の率直な印象としては『価値の問題だな』と思います。たとえ『役に立つ』と相手に伝えてもその人にとって『役に立つ』かはわからないという点で、価値の押し付けあいになってしまうのです。ただ、答える際には測定という大きなテーマで社会への応用を伝えるかな。」

西口：「役に立つかどうかを聞かれた時点で僕の講演は失敗だったんだなと反省しますね。研究の面白さが伝わりきっていないということになりますから。自分の研究が今すぐに社会の役に立つことはないとはっきり言った上で、この研究は物理を発展させていくことにおいて重要だと話します。」

(聴衆4)「研究のディスコースを伝える必要があると思いますか、また今まで行ってきた実践はありますか。」

森：「文京科学大学などの活動で試みていました。そのような機会は降ってくることはないので、自ら作らなければいけないと思います。」

西口：「研究者がどのような生活をしているのかを伝えるのは重要だと感じています。昔、高校生相手に実験の流れを見せることはしたことがあるが、(私自身が研究に対して)昔と今では感じることは違うんだろうなと思います。」

二木「それではここでまとめをしたいと思います。本日のパネルディスカッションでは『研究を伝える意義はあるのか』についてお二人の伺ってきました。お二方は研究を伝える意義を自明視しているようにお見えして、さらには西口さんが途中でおっしゃっていたように『科学者の責任』という考えをお持ちだと思われます。そしてそれらを10分で伝えます!や文京科学大学などを通して様々な形で発信してきたとのことでした。本日はどうもありがとうございました。」

ディスカッション

<議題>

科学館の1コーナーで、
自らの研究を伝えるSCをデザインせよ

※数人ずつの班に分かれ、各班にいる研究者の研究内容をテーマにした。

アフタートーク

藤田尚輝・二木浩司・久保田祐貴・韓東学

アフタートークは、第四回SCを考える会の参加者有志が、会の内容を振り返りながら自由にトークした様子を記録しています。

～研究者同士のパネルディスカッションについて～

藤田「『わかりやすく、と言うとそこにはかり(SCデザインの)目がいってしまう』という旨の西口さんの発言がありましたが、伝えることができた時点で「科学者のモチベーション」を達成したのではないかと思ってしまう節があります。ディスカッションの途中で、市民へ伝える活動のモチベーションは『自分の研究した内容を知ってもらいたい』というのが大きいという旨の発言がありました。それならば、わかりやすく伝えたことによってそのモチベーションは達成されたのではないかと思います。」

久保田「モチベーションとしてはそうかもしれませんが、市民への説明という意味では科学者は研究予算の獲得に関連して説明責任を目的とすべきだと思いますよ。」

藤田「サイエンスコミュニケーションの意義を挙げると「予算獲得のための説明責任」なんて説明が挙げられますが、説明責任を果たせば研究予算が上がるのでしょうか。研究予算の割り振りは市民が行なっている訳ではありませんから、市民にわかりやすく伝えることが予算獲得と結びつくとは思いません。」

久保田「確かに、予算獲得に繋がる訳ではありませんね。寧ろ順番は逆で、税金がどんな研究に使われているのかということに対する説明責任というのが正しいと思います。科学者は市民への説明に割くリソースが限られています。サイエンスコミュニケーターはそのリソースのうち何を代替するのかという視点が重要になってくると思います。」

二木「科学者以前に社会の構成員であることを鑑みるに、アウトリーチは重要な要素だと思いますよ。あと、研究者内部でのコミュニケーションの必要性ということについてもパネルディスカッション中で述べられていましたが、実際に研究に携わってる久保田さんもその必要性を感じることはありますか。」

久保田「例えば数学者と物理学者の学際的研究において、それぞれの分野間の専門用語のずれを解消するのに1年近くかかったというお話を聞いたことがあります。このような場合には特に研究者内部でのコミュニケーションの必要性を感じますね。」

韓「分野の専門化・高度化に伴い研究者のコミュニティーが閉じられがちなので、SCを行うことで他の分野との交流をしやすくさせる効果もあるかと思います。」

久保田「科研費にも、新学術領域研究を作ろうという取り組みがあるそうですね。」

～10分で伝えます！東大研究最前線について～

韓「鈴木さんは、話し方の面などでいくつかのポイントを挙げてくださりました。皆さんはSCで話し方で気をつけている点は何かありませんか。私は第一印象が重要だと思っているので、笑顔で話すことを心がけています。」

藤田「実は説明の中身以外にも説明している人の魅力や信頼性が影響してくることも大きいという指摘はありますよね。例えばボディランゲージも重要な要素だと僕は考えています。」

久保田「無意識の部分は重要ですね。」

韓「視覚が無意識の大半を占めるという研究を読んだことがあります。」

久保田「僕は、話し方で気をつけているのは特に話す速度、間や抑揚ですね。強調したい部分は主語と述語を明確にすることも意識しています。メディアとコンテンツという視点で、話し方は考えた方が良くかもしれませんね。」

～SINAPS について～

藤田「人見さんが、自主研究は日常と研究の中間的存在であるというお話をしていましたが、それを私なりに言い換えれば SP と SE の中間的存在であると言えます。」

二木「楽しむことが行動の強化に繋がるという意味でその通りだと私も考えています。」

藤田「気になる点があるとすれば、楽しむという行為が投げられてしまっているという点でしょうか。」

二木「そうかもしれませんが、それで楽しんでいる人もいたので良いのではないのでしょうか。」

藤田「それで楽しむことができない人に対してはアプローチしなくても良いのですか。」

久保田「楽しむという行為を投げるという話は、『楽しみ感が上から与えられている』という感があるという意味と理解して良いですか。」

藤田「楽しめるかどうかはその人次第で、研究は楽しめる人をかなり選んでしまうコンテンツではないかということです。人見さんのおっしゃっていた『研究の文化を作る』という目的を達成するためには、多くの人を楽しませる工夫や仕組みが必要になるのではないかと思います。」

久保田「文化を作るにはどうすればいいんでしょうね。」

藤田「人見さんは産官学の連携が重要だとおっしゃっていましたね。」

久保田「つまりネットワーク同士の交流がまず重要なのではないのでしょうか。この SC を考える会のように、自主研究においてもそこらに小さなネットワークが溢れているはずで、それらが交流を持つことが文化の形成において重要だと考えています。例えるなら、大木を集めて森を作るようなことだと思っています。」

藤田「ネットワーク同士の交流は重要だと思いますが、森に例えるならそれらの大木から周囲に種を撒く仕組みがなければ文化として根付いていかないのではないのでしょうか。そのためには、自主研究の楽しさがわからない人向けに、楽しくなるような工夫をすることが重要だと思うのです。」

二木「不毛の土地に対してタネを蒔く必要があるとは思えません。問題を大きく捉えすぎているんじゃないでしょうか。」

藤田「確かに最初は面白いものを見せたいというモチベーションから始まっているが、実際には社会的意義を言う場面が多いため『種を蒔く必要がある』と言う必要が生じているだけという視点もあると思います。SCにおける本音と建前があるかもしれませんね。」

二木「少し『自主研究』の話からずれてきたので、話を戻しましょう。SINAPSさんの活動についてどう捉えますか。」

藤田「SINAPSさんの活動は、研究のアフターケアを充実させるものであるように思えます。私も以前にサイエンスインカレに出場したことがあります。他人の研究発表を見たり交流を持つことで、より研究のディスコースを知ることができようと思いました。」

二木「おっしゃる通り、研究のアフターケアを充実させることがSINAPSの主張だと私も捉えています。」

藤田「研究を『伝える』という段階の次に研究を『楽しませる』という段階があるのかもしれないですね。」

～Share Study について～

久保田「としちる氏の発表で印象深かったのは『研究者の人を見せる』という部分です。私が以前に代表をしていた工学博覧会でも人を見せる展示をしたことがあります。研究者は何をして生活しているのか、研究成果ではなくありのままの研究者を見せるというコンセプトでした。例えば教授方の人生の転機の一冊などを展示しましたね。研究者は展示されるテーマに思いを込めているので、それをなるべく引き立たせるような展示になりました。」

藤田「テーマに込められている研究者の思いという視点は重要ですね。テーマに対する思いがSCデザインにも影響してくるように思います。よく教育学の歴史を見ると、授業の典型化に対する批判というのがあって、その授業デザインには教師がその授業で扱うテーマにかける思いというのが滲み出ている、それを考慮せずに典型化してしまうと授業として機能しないという批判です。」

久保田「デザインだと伝えていくことが重要かもしれませんね。あと、もう一つ注目したのはゼミっぽい関係性という言葉です。public と private の中間が抜けているのが専門家と市民のギャップを生んでいる原因かもしれません。」

藤田「ゼミっぽい関係というのはサイエンス・カフェとはまた違うものでしょうか。」

久保田「近いかもしれませんが、『ふらっと来て、ふらっと帰る』場所を設けることはまた別だと考えています。『芋づる式読書マップ』が良い例になるかもしれません。ただ科学好きしか来ないため、外に開かれづらいというのが課題ですね。」

編集後記

まずはじめに講演者の方々、会の運営係、当レポート作成に協力してくださった方々に感謝致します。第四回 SC を考える会に参加できなかった方が読んでも会の様子を把握でき、会に参加した方でもより深く考察を深められるヒントとなるよう心掛けました。第5回 SC を考える会で皆様とお会いできることを楽しみにお待ちしております。

編集 藤田尚輝